

〔原 著〕

スウェーデン体操における 「自然的方法」のわが国への導入に関する一考察

頼住 一昭 (愛知教育大学)

A Study on the Introduction of the Natural Method into Swedish Gymnastics in Japan

Kazuaki YORIZUMI

【Abstract】

Swedish gymnastics were introduced into the Japanese education system in the early 1900s by Motokuro Kawase and Akuri Inokuchi, and have since developed as an integral part of school gymnastics in Japan.

The Swedish gymnastics introduced by Kawase and Inokuchi were based on Lingianism, one of the two mainstream methods of gymnastics in Sweden at the time, which takes a strictly formalistic approach. On the other hand, the natural method, the other mainstream form featuring more natural and sportive elements, did not take root in Japan.

This paper strives first to elucidate the key events that led to the introduction of Swedish Lingianism into Japan, and then to discuss the reasons why the other form, the so-called the natural method, did not become widespread or take hold in the country.

The study found that the Swedish gymnastics introduced by Kawase et al. had developed centering on Boston in the United States and were based on Lingianism, one of the two mainstream types of gymnastics at the time, which focuses on a formalistic approach. On the other hand, the natural method, which was introduced by Otani et al., was regarded and introduced as a new type of gymnastics different from Swedish gymnastics.

Keywords : Ling, Lingianism, New gymnastics.

キーワード : リング, リング主義, 新体操

はじめに

P. リング (P. Ling, 1776-1839) によるスウェーデン体操は、国民国家形成期の世界各国に紹介・導入され、その数はおよそ 50 ヶ国近くにもものぼる。そのなかで、日本の教育界における具体的な紹介は、川瀬元九郎 (1871-1945) と井口あくり (1870-1931) によってなされたことはこれまでの先行研究の指摘するところである^{注1)}。

川瀬は、1892年にアメリカに渡り約7年間の滞在中に医学と体操を学び帰国後スウェーデン体操に関する著書『瑞典式教育的体操法』³⁾と『瑞典式体操』¹⁹⁾の二冊を著しこれを紹介した。また、井口は1899年5月に文部省から辞令¹⁸⁾を受け体育を勉強するためにアメリカへ派遣され約3年間滞在し、1903年に帰国した。彼女は『体育之理論及実際』¹⁴⁾と『各個演習教程』¹⁵⁾を著したが文筆活動よりもむしろ講習会を通じて新体操を広めた²³⁾。

それはともかく、その後の日本におけるスウェーデン体操の普及・発展は、1913年1月28日の文部省訓令第1号の制定により学校体育における統一的な指導方針すなわち「学校体操教授要目」が提示され、教科の中心教材として採用されるなど戦前の日本における学校体育に中心的な役割を果たすこととなる。

ところで、川瀬や井口らにより紹介されたスウェーデン体操は、その創始P. リングの死後、スウェーデン本国 (以下「本国」と略す) において生じたスウェーデン体操の二つの流れの一つである。一つはHj. リング (Hj. Ling, 1820-1886) やL. テルングレン (L. Törngren, 1839-1912) らを中心として発展した厳格な形式を重んずる「リング主義」(The Lingianism) といわれるものである。もう一つの流れであるG. ニュブレウス (G. Nyblaeus, 1816-1902) やV. バルク (V. Balck, 1844-1928) らを中心として発展する自然的でスポーティブな要素を盛り込んだ「自然的方法」(The natural method) と称される考え方や実践は結果的に定着するには至らなかった^{24) 42) 60)}。

そこで本稿では、以上の流れを踏まえ本国における二つの流れの一つである「リング主義」がどのような経緯を経て日本に紹介されその後定着していったかを明らかにした上で、もう一つの流れ

である「自然的方法」は結果的にどのような形で紹介されるに至ったか考察することを目的とした。

本論

第1章 本国で生じた「リング主義」と「自然的方法」

(1) P. リング没後の二つの解釈

P. リング没後、G.C.I. (Kungliga Gymnastiska Centralinstitutet.) 内部は後継者による衝突が生じた。大別すれば「リング主義」を主張する人達と「自然的方法」を主張する人達の二派に分けることができる。

この点については、彼の遺稿集である『体育の一般的基礎』の内容が示すように、P. リングは自分の体育について具体的なものを十分明らかにしておらず、体育の原理についてはほぼ全体を示しているが、教材や施設、用具や指導法や指導者、その他の諸問題に関しては未完のままであったことが原因と思われ²⁸⁾、そのために後継者間での解釈が分かれるという結果になった。

以下に述べるように、この二つの大きな流れは、その後日本にスウェーデン体操が紹介され、これを導入する際にも結果的にその性格を規定することになる。

(2) 「厳格」な体操か、「自然的」な体操か

1839年に創始者であるP. リングが没し、G.C.I.の校長職を引き継いだのは彼の教え子であるL. ブランチング (L. Branting, 1799-1881) であった。彼は、スウェーデン体操の四つの柱のうちの一つである医療体操に力点を置いていた^{注2)}。そのため彼が1839年から1862年まで校長の職にあったこともあり結果としてその他の分野に対して力が注がれなかったといわれ、その後のG.C.I.内部の論議を生むことになる^{25) 46)}。このような中で教育体操を発展させ体系化に努めたのはP. リングの息子であるHj. リングであった。しかし、Hj. リングの教育的体操は、個々の運動の生理学的な観点の厳密性を要求するものであり、その保守性を高める結果を招いてしまった。このような考え方を後に「リング主義」と呼ぶこととなる。しかし、対立する意見も現れることになり、G. ニュ

ブレウスやV.バルクらを中心とする「自然的方法」が生まれるのである。この「自然的方法」とは先の「リング主義」とは対象的に、体操にあまり規定を加えるのではなく、動きの自然な方法を強調するものであった。

J. リンドローツ氏 (J. Lindroth) は「リング主義」についてその特徴を以下のように著している²⁶⁾。

- ・個々の動きの明確な効果は分析され細かく決定されなければならない。
- ・あいまいな効果を持っている動き、あるいは明確に生理的目的を示さないものは望ましくない。
- ・すべての身体教育は非常に器用に、そして調和に基づいたものでなければならない。それは、体のすべての部分がよく修練されているということと同じである。
- ・コントロールされていない、また、孤立しあらかじめ定めることのできない運動の修練は生理学的な観点から無用である。
- ・楽しむことの要素は特に重要ではない。

一方、G. ニュブレウスは、1862年から1887年にかけてG.C.I.の校長職を務めた。同じくJ. リンドローツ氏によれば、G. ニュブレウスの考えの要点については以下のようにまとめている。

「システムや方法を念入りに仕上げたというよりは、態度というべきものであり、そして彼の考え方の一部には多くの体操を制限しないということがある。G. ニュブレウスの必須の要素は、いわゆる動きの自然な方法、主に歩、走、跳躍である。また彼は、なによりもランニングを要素とした訓練を好んだ。彼の基準の一つは古代ギリシャの五種競技の形態である」²⁷⁾。

氏は、G. ニュブレウスの基本的な考えをこのように述べ、また以上のような考え方をG. ニュブレウスは、「自然的方法」と呼んだとしている。しかし、この考え方は後に「リング主義」と対立することとなる。この考え方や実践方法の違いは1870年代以降に顕著になる。

以上のような経緯で生じた本国におけるスウェーデン体操の二つの潮流は後に、Hj. リングの後を継いでG.C.I.の教育体操部の主任になったL. テルングレンとG. ニュブレウスの後継者で軍隊体操部の主任になったV. バルクの二人に引き継が

れていくことになり、国際的にも広範な影響を与えることになる。

(3) 歴代校長によるスウェーデン体操への影響

P. リングにより始められたスウェーデン体操は上述の通りG.C.I.を中心に発展するのであるが、特に興味深いことは3代目校長G. ニュブレウスから12代目校長N. ヘルステン (N. Hellsten) までの100年以上に及ぶ期間G.C.I.では軍人としての肩書を持つものや軍から転籍した指導者が校長職を務めていたということである^{注3) 6) 7)}。このことは、P. リング以後のスウェーデン体操に大きな影響を与えることになり、日本へのスウェーデン体操の導入時にも大きな影響を与えたと考えられる。

第2章 “TIDSKRIFT I GYMNASSTIK” と Hj. リングの「Friskgymnastik」について

(1) より大きな概念を示す「健康体操」

1874年にSKANDINAVISKA GYMNASSTIK-LÄRARESÄLLSKAPET (スカンジナビア体操教師会) から創刊・出版された“TIDSKRIFT I GYMNASSTIK” (体操雑誌) (以下「T.I.G.」と略す) は当初年2回、G.C.I.出身の体操指導者向けに発刊された雑誌である。その後、刊行回数を増やし1927年までは年10回、1931年からは毎月発刊されている。当時この編集には、編集長をT. ハルテリウス (T. Hartelius, 1818-1896) とし、L. テルングレン、V. バルクそしてHj. リングがかかわっていた。編集長はその後、L. テルングレン、N. セレン (N. Sellén) などに引き継がれている⁴⁹⁾。また、その内容は新しい指導指針や年次報告、国内外の新しい情報、書評、本の紹介、死亡記事など多岐にわたり掲載されている。なかでも、P. リング以後「リング主義」を発展させ、また「教育体操」の発展・体系化に努めたHj. リングは、創刊以来7年間、合計13回にわたり“Om friskgymnastiken vid kongl. Gymnastiska Centralinstitutet” (G.C.I.の健康体操について) という題名で論文を掲載している。これは、1874年の「T.I.G.」創刊と同時に開始され、それまでのG.C.I.における彼の30年間を総括するような形で「Friskgymnastik」(健康

体操)が普遍性を持つものであることを示している⁶²⁾。

ところで、この「健康体操」という言葉がいつ頃から使い出されたかは今後の課題であるが、この表現はHj. リングが用いる以前の1830年代にはすでにP. リングにより「体操を通じての健康」ということで使われている²⁾。

また、この「健康体操」は教育、軍隊、医療、美的といった四つの体操を整理する概念であり教育体操や軍隊体操よりもさらに大きな概念で位置づくものであると言われている⁴⁸⁾。したがって、それらは学校の生徒達を念頭に置いて整理・配列した教育体操を一步進め教育目的を超えて生体の各器官に効果をもたらす体操として配列・組み合わせをしたものも包含している。その指導内容としては、G.C.I. で教える教師は、生徒一人一人に指導がいきわたるように生徒の数をより少ない人数で編成し、定められた時間内で運動することができるようにすること、そして、それらの体操の指導は脚の運動、腕の運動などというように分類され、それらの運動がそれぞれにやさしい運動から難しい運動へと配列された「進捗表」をもっておりそれに従い実施するようにとされている。また、実施する運動には35歳以上、14歳から18歳、12歳から14歳、9歳から12歳といった年齢制限を定めたり、熟練者や素質または身体発育に従ってグループを分割し体操を行うようにとされている。そして、それらの体操は基礎のしっかりとした体操であることを心がけ、すべての体操はより新鮮でなくてはならず実施者(若者)を飽きさせない内容、すなわち、動きのテンポに変化のないものは回避し、そして、多くの体操の配列が似たものにならないように、また、体操実施はリズムカルで活発な体操と完全休息を兼ね備え、自由な遊びと体操、叱咤激励を上手に使い分けて行うようにとされている。その他に、指導者は生徒を恐れずに厳しい規則を維持するようにし、明確なフォームと正しい順序を厳しくチェックすることなどとされている⁸⁾。

いずれもこれらは後の「DAGÖVNINGAR」いわゆる「体操日課」につながるものと考えられる。それゆえ、G. モーベルイ(G. Moberg, 1875-1961)

が指摘するように「健康体操」は「教育体操」と等価であり、しかも、この全体を含むより大きな概念であるとされ、また医療体操とも両義的であるともいわれている⁵⁰⁾。

なお、この「両義」という意味は、本来「健康体操」とは「医療体操」からの観察や経験から生まれたものでもあるということに起因している。つまり、体操の形式などといった対立関係を示す意味ではなく、「Frisk」と「Sjuk」すなわち「健康」と「医療」といった言葉としての違いを表したものであると理解すべきであろう。

(2) 「Friskgymnastik」の概念を用いた時代区分

O. ホルムベルイ(O. Holmberg, 1882-1969)は、P. リング没後のスウェーデン体操の発展において著書“*Den Svenska Gymnastikens Utveckling*”の中で、P. リング没後100年の時代を1839年-1882年、1882年-1907年、1907年-1939年の三つに分けている⁹⁾。

それゆえ、ここで注目されるのは彼の区分には、P. リング以後、考え方の違いから生まれたスウェーデン体操の二つの流れである「リング主義」と「自然的方法」について、その対立の記述は一部あるものの、その時代区分までには至らず、それらを「健康体操」の時代という一つの大きなくくり方でまとめていることである。つまり、二つの大きな流れは意識されずに20世紀前半まで概観されていると見ることができる。

したがって、この三期に分けた時代区分は、日本のスウェーデン体操がなぜ本国における二つの流れの中の一つの受容となってしまったのかを理解する上では示唆に富むものでありこれもまた注目しなければならない。

第3章 本国における新しい体操改革運動

(1) 「Frivillig Gymnastik」の登場

今日の市民スポーツの基盤になったと考えられる「Frivillig Gymnastik」は1860年代に登場したといわれ、その原動力はメンバーのボランティアな力であり、その初期においては技術的な高まりを求めていこうとするところに大きな特徴があったといわれている³⁶⁾。

スウェーデン体操は、今日みられるような自然的でスポーティブな要素をもつ動きとは異なり、いわゆる形式的で堅苦しい体操が主体であったといわれている。しかし、特に20世紀初頭になるとこのような人為的・形式的な体操に対する改革運動は、子どもや女性への配慮とともに従来のそれとは違った新しい活動内容を生み出していった⁴⁴⁾。このような新しい体操の転機を迎えるようになったのは、19世紀末から20世紀初頭にかけて起った改革運動がその一つの起点と考えられる。また、これらの体操改革運動は、①生理的機能の向上をめざしたグループ。②表現体操の名のもとに「表出」を主張したグループ。③リズム的な方向を指向したグループ。④古典バレエの固定図式を打ち破り、モダンダンスの確立を目指したグループ。といった大きく四つのグループに分けることができ⁴⁵⁾、先行研究が指摘するように特に1919年以降、それらの体育改革を推進した一つである北欧体育運動(Nordische Gymnastikbewegung)は、その後の自然体育や新体育運動といった現代体育の登場に大きな影響を与えることとなる。この北欧体育運動の源流とは、P.リング以後の「自然的方法」であり、一般に「Frivillig Gymnastik」と表現されるものであるといわれている⁴³⁾。

(2) 「Frivillig Gymnastik」の運動内容の比較

「Frivillig Gymnastik」の最初の動きは、中等学校における義務的な「Gymnastik」に対して、活力のあふれた生徒たちが教師の指導の下に、自由な時間に行うようになったのがその始まりであろうと言われている。自由な時間楽しさを求めた彼らの動きは、跳馬を跳ぶにも姿勢を気にせず、あるいは跳馬の背に数人が伏せ、その上を飛び越すなど、それまでの「gymnastik」では考えられなかったような、自由な発想によるものであった³⁷⁾。この特徴から時には健康のためという目標さえも放棄する場合があります、より技術の追求の過程では困難や危険に対しても挑んでいく姿勢、つまり技術化を求め「競技的」に、あるいは演技として出来栄を「見てもらおう」ことに重点を置くような方向性も持っていたということである³⁸⁾。こ

れらの動きについては、1907年から1909年の間G.C.I.の校長をつとめ、またスウェーデンにおける「近代スポーツの父」といわれたV.バルクが1888年に著した著書「ILLUSTRERAD IDROTTSBOK III」⁽¹⁾にもその一端を認めることができ、「Frivillig Gymnastik」と「The natural method」の考え方に共通するものを認めることができる。それゆえ、「The natural method」と「Frivillig Gymnastik」を分けて考えることは難しい。

このような、余暇時間に自由な意思に基づいて行われた体操は、結果的に19世紀末から20世紀初頭にかけての人為的な運動の考え方に対する反省や、人間の動き自体の形成をめざす運動教育への試みといったいわゆる改革運動につながり発展していったと捉えることができよう。また、このスウェーデンにおける「Frivillig Gymnastik」の「Frivillig」とは、「自由意志の」「自発的な」という意味であり、この運動は自由意志で種々の可能性を求めて行う体操の総称として用いられている。主にその活動内容は、E.ヴェスタグレン(E. Westergren, 1909-1967?)らによれば重要なものとして次の四つをあげている⁶³⁾。

① Motionsgymnastik

種々の運動欲求を満たすことをねらいとした体操で、座りがちな人や偏った作業姿勢を強いられているような人にバランスの良い身体刺激とレクリエーションな楽しみを提供するものであり、これに属するものとしては家庭婦人のための体操や現業の職場に適した体操、または事務の職場に適した体操などをあげることができる。

② Elit och tävlingsgymnastik

技術的に優れた者ないしは、これを目指す者たちのための体操をさし、競い合い評価されることによって技の可能性を追求するものである。また、tävlingsgymnastikとは、競い合い評価されることによって技の可能性を追求するものである。

③ Ungdomsgymnastik

青少年のために配慮された体操で、楽しみや満足が得られるように特に工夫されたものである。それによって彼らの健全な心身の発達を促そうとしている。

④ Specialgymnastik

一般的にコンディショニング体操といわれているものである。スウェーデン語において *fortbolls-gymnastik*、*brottningsgymnastik*、*skidgymnastik* などのように固有名詞に“*gymnastik*”をつけてこの種の体操や運動を表現している。

このように「*Frivillig Gymnastik*」は、以上四つの領域にまとめられているが、これらの四つの領域は発生当時から網羅されていたわけではなく、時代を経ることによって次第に領域を拡大してきたものである³⁹⁾。

また、この「*Frivillig Gymnastik*」の時代的特徴については、同様に E. ヴェスターグレンが指摘するように、1860-70年代は身体的能力の優れたエリートを強調する②の *Elit och tävlings-gymnastik* が主流であったといわれ⁴⁰⁾、V. バルクが1870年代から90年代にかけてスウェーデン体操の紹介のために各国で実演を行い「見せること」に重点が置かれた体操にその典型を認めることができこのことを裏づけるものであろう。また、このような背景の中、1877年にV. バルクが初めて率いて遠征を行ったストックホルムの体操組合のチームは、熟練したエリート体操集団による演技披露であった。このような遠征がひいては、1906年のオリンピック中間大会や1912年の第5回オリンピック・ストックホルム大会での男女の集団体操演技に大きな影響を及ぼし、スウェーデン体操の世界的名声を高めることになったのである⁴¹⁾。そして、この第5回オリンピック・ストックホルム大会でのデモンストレーションは、「オーストリアの自然体育の創始者」と言われる K. ガウルホーファー (K. Gaulhofer, 1885-1941) に強烈な印象を与えたと言われている⁴⁾ 12)。また、野々宮徹氏は「E. ビョルクステン (E. Björkstén, 1870-1947) が女子体操によって国際的な名声を高め、スウェーデンにおける女子体操の幕開けとまでいわれるような機会をこの1912年のオリンピックで得ることとなる」^{注4)} 35)と指摘し「*Frivillig Gymnastik*」が改革運動に与えた影響の大きさについて述べている^{注5)}。

第4章 日本におけるスウェーデン体操の紹介

(1) アメリカ経由のスウェーデン体操

以上のような本国における経緯のなかで日本の教育界に初めて具体的にスウェーデン体操を紹介したのは川瀬と井口であることは上述の通りである。

川瀬は、帰国後(1902年)二冊の著書を出版した。主任で編纂した『瑞典式教育的体操』は H. ニッセン (H. Nissen, 1855-1924) の “*ABC OF THE SWEDISH SYSTEM OF EDUCATIONAL GYMNASTICS*”³⁴⁾ を基本に作成したものであり、また『瑞典式体操』を著すにあたっては N. ポッセ (N. Posse, 1862-1895) の “*THE SPECIAL KINESIOLOGY OF EDUCATIONAL GYMNASTICS*”⁵⁸⁾ をその主な拠り所にしたといえる。彼が主な拠り所にしたこれらの著書の内容を検討すると厳格な形式を重んずる内容がほとんどであり「リング主義」と考えられる⁶¹⁾。

一方、井口は約3年間滞留したアメリカのスミス・カレッジとボストン体操師範学校を中心に体育を学んだと言われ、スミス大学では体操科と生理学を学んだ。彼女の体育教師は G.C.I. で学んだ最初のアメリカ人女性、S. ベレンソン (S. Berenson) であり、ここで彼女はスウェーデン体操を学んだと言われている。その後、1903年に帰国した彼女は、東京女子高等師範学校の国語体操科専修科の教授となりスウェーデン体操の指導にのりだすこととなる²⁰⁾。

こうした二人の活動は以後、スウェーデン体操を日本に普及させ次第に現場の関心を集めることになるが、以上の経緯からも明らかなように日本の教育界に初めて具体的に紹介されたスウェーデン体操はアメリカのボストン市を中心に行われていたものであった^{注6)}。しかし、両者のスウェーデン体操に対する考え方は相違しており川瀬は、生理解剖学的理論を背景とするスウェーデン体操の科学性を強調し、形式化した普通体操に変わる役割を期待して体操学校卒業生によるスウェーデン体操の普及を企画した。それに対し井口は、スウェーデン体操を女子に適した運動法と理解し男子中心の普通体操に変わる女子体操としての普及を目指したのである。このように、川瀬が科学性

を強調し、井口は女子体操の普及に力を注いだものの両者の基本的な考えは同じであり、木村吉次氏は「演習の順序を「記憶」させて運動を行わせる方法ではなく兵式体操と同じように“号令”を取ることによって生徒を集中させることであった。すなわち、生徒の注意を自己の身体の運動そのものに集中させようとし生徒の精神の集中、緊張を求めた」²¹⁾と述べている。

(2) 理想としての「合理的体操」の唱導

以上の経緯を経て、スウェーデン体操は日本の学校体操の中心教材として取り入れられることになる。しかし、以後行われる理論軽視の実際指導に対し医学者から批判されることとなる。その後、人体の医学的知識を基礎として考案し行った「合理的体操学」のすすめが唱導されるに至る。その提唱者とは、当時、体操の教授理論に大きな影響を与えていた九州帝国大学医学部教授・桜井恒次郎(1872-1928)であった。

桜井は、1917年頃から1913年に制定された要目体操に対し医学的・解剖学的な立場から再検討を行い、体操教材に対する科学的な認識がなければ効果はあがらないことを指摘し、当時の学校体操の実施状況を批判し実践にかなり大きな影響を与えた。そこで彼は学問的根拠に基づいた実際の体操教授の方法の確立を目指したのである^{22) 29)}。彼は『合理的体操学』¹¹⁾を唱えると同時に体操に関する講演や講習会、学校現場の指導などを通して当時の学校体操の実施状況を批判し実践にかなり大きな影響を与えた⁵¹⁾。

桜井は、1914年に開催された九州帝国大学第3回講演会(9月14日)での『体操之本体』という速記録の中で、「体操の教員ほど虐待されているものはなく、また、体操という科目ほど教育界から継子扱いにされているものはない」と述べ、さらに、「体操の教員そのものが体操とはどんなものであるのかを心得ていない」⁵²⁾と述べている。このことは、学問的根拠に基づき体操教授の方法の確立を目指した桜井が当時の各学校における教師達のスウェーデン体操に対する指導方法の現状を批判したものであると考えられ興味深い。

そこで、桜井はこのような状況を改善するた

めにはいくつかの教程を順番に繰り返す当時の形式的、画一的な体操教授を批判し、教師自らが児童・生徒の身体的状況を考慮した教案を書くべきことを主張したのである³⁰⁾。しかし、実際にはこのような桜井の理論は「リング主義」であるL.テルングレンの原著『体操指導書』“LÄROBOK I GYMNASTIK”⁵⁹⁾をG.A.Shairerが独訳した“Lehrbuch der Schwedischen Gymnastik”に述べられた形式を参考に従ったものであった⁴⁷⁾。また、その当時、桜井自身が参考にした本が本国における二つの流れの一方である「リング主義」であるということ意識してスウェーデン体操を教授したかどうかについては今後の課題にすると、桜井の要目体操に対する学問的根拠に基づいたこれらの批判は従来のL.テルングレンやHj.リングらによる「リング主義」の方法と考えられる^{注7)}。

しかし、桜井による「合理的体操」のすすめは、当時医学界から提唱されたものであり、その意味では大正期において日本の体育現場に科学的(医学的)根拠を求めた功績は大きく、その後の日本における教育現場(体育)に科学研究を求める素地を与えたといえよう。

1922年に発行された石丸節夫編『体操講演集』には、桜井の言葉として「私の説へる“合理的体操”とは、どんなものであるかと言ふに、決して私が発見したのも、亦案出したものでもなく、従来も学校で行って居る“瑞典式体操”である。瑞典式の体操も、リング氏が考案してからは幾多の年月を経過して、変遷に重ねて居るが、然し私の述べる瑞典式体操は、現に瑞典で行って居る、その儘の直訳的なものではない。私のは瑞典式の体操を学問的の立場から研究したもので、謂はば和製の二字を冠した即ち、“和製瑞典式体操”である。ところがこの“和製瑞典式体操”は、運動そのものを、“斯うしたならよからう”とか“あ、行った方がよい”とか、言ふやうな不徹底のことは、決して許さない、飽く迄も学問上からして“斯うせねばならぬ”“斯うすればよい”“斯うしては悪い”と説明することができるのである。実に合理的である。従って和製瑞典式体操は、学問的に本家本元を凌駕して居る譯で

ある。斯様な理由で、和製の瑞典式体操は、又合理的体操とも謂はれて居るのである¹⁷⁾と著されている。

以上のことから、桜井は当時行われていたスウェーデン体操に対して人体の医学的知識を基礎にした「合理的体操」を唱導したのである³¹⁾。

(3) 文部省に高く評価された桜井の体操

以上のことから、桜井恒次郎がスウェーデン体操を医学的・解剖学的な立場から再検討し、その学問的根拠に基づいて目指した実際の体操教授の方法の確立とはL. テルングレンを明らかに参考にしており、「リング主義」に基づくものといえるであろう。彼が提唱したスウェーデン体操とは、日本で従来行われてきたスウェーデン体操と本質的には変わらず、不徹底な部分を補ったという意味での再確認であったことがわかる。しかし、このような桜井の体育論に対し当時の体育関係者及び文部省は彼に高い評価を示している。その裏づけとして大熊廣明氏が指摘するように、桜井が講師をつとめた1917年と1921年の二回にわたり開催された師範学校中学校高等女学校教員等講習会があげられる。この二つの講習会は文部省の主催である。そして、実現はしなかったものの1921年の講習会の翌年の1922年にも文部省は九州帝国大学での講習会の開催を希望していたという事実がある。このことは、桜井の体育理論に対する文部省の評価が高かったことを証明するものである。また、中等学校教員等を対象とした講習会の会場は1917年と1921年に九州帝国大学で開催されている以外は、すべて東京高等師範学校または東京女子高等師範学校で開催されておりこのことからわかるように東京高等師範学校及び東京女子高等師範学校以外で体操科の講習を実施し得るのは、九州帝国大学医学部を措いて外にはなかったことを意味し、桜井の体操論が高く評価されていたことがわかる⁵³⁾。

以上の二点から当時の学校体育界における桜井の存在の大きさと、彼の体操論に対する文部省の高い評価がわかり、当時の日本におけるスウェーデン体操に対する桜井の体操論への影響力が強かったことがうかがえる。

第5章 戦前における「新体操」への認識

(1) 大谷武一と「自然的方法」

これまでの経緯から、日本におけるスウェーデン体操の紹介・導入は、本国における二つの流れのなかの一方である厳格な形式を重んずる「リング主義」的体操につながるものであることが確認できる。

しかし、以下に示す通り、もう一方の自然的でスポーティブな要素を盛り込んだ「自然的方法」も戦前において日本に紹介されていたのである。

大谷武一(1887-1966)は1930年に『新しい体操への道』⁵⁴⁾を、また1933年には二宮文右衛門(1884-1946)の『エリ・ビョルクステンの学校体操』³²⁾、二宮文右衛門・今村嘉雄(1903-1997)・大石峰雄の『体育の本質と表現運動』³³⁾と新体操を取り扱ったものが日本でもいくつか出版され北欧の新体操を紹介している。この新体操というのは、スウェーデン体操、ドイツ体操など古くから行なわれているものに対する新しい体操を意味しており、新体操は旧体操から脱皮しようとする点では共通しているが、その方法からみるといろいろ異なっている。これら、新体操の中で日本の体操界に対して大きな影響を与えたものは、N. ブック(N. Bukh, 1880-1950)の基本体操、K. ガウルホーファーの自然体操、E. ビョルクステン(E. Björkstén, 1870-1947)の新スウェーデン体操、R. ボーデ(R. Bode, 1881-1870)の表現体操などの理論と実際であったといわれている¹⁶⁾。

その中で大谷の『新しい体操への道』では、戦前に日本に紹介された新体操について特に詳しく述べられている。彼は、北欧における新体操を「最近に至つて初めて北欧体操の自由派を代表するニールス・ブック、エリン・ファルク及びビョルクステンに影響され、特に國民や環界の特性に顧慮しつゝ、正しい身體練成に努力するところの道が歩まれた。この自由派こそは型に嵌った瑞典式よりももつと自然的な方法を選ぶのであるが、この自然体操こそ藝術体操に優るとも劣らぬところのものであつて尠くともこれと對等の位置を占むべきものである⁵⁵⁾と紹介している。その中の一つにE. ファルク(E. Falk, 1872-1942)の体操があることが注目される。E. ファルクは当

時ストックホルムの小学校の体操視学として活動しており、N. ブックやE. ビョルクステンなどとともに北欧体操の自由派を代表する一人であった。そのE. ファルクに関して大谷は、「型に嵌った瑞典風よりも、自然体操を擇ぶのであるが、女史が初めてストックホルムの小學校の體操視學に就任した際體操指導に對する注意事項として次の四ヶ条を數へ、従來の體操に對する彼女の態度を明らかにした」と述べている。なお、文中の四ヶ条とは以下の通りである⁵⁶⁾。

- ① これまでのやうに深い肋木使用の胸後屈運動を行はせてはいけない。
- ② 従來のやうに臂の運動を多く擇んではいけない。
- ③ 懸垂運動を多く課してはいけない。
- ④ 姿勢及び動作は一般に硬くあつてはいけない。

E. ファルクが強調したこれらの点は、本国における二つの流れの一つである自然的でスポーツ的な形式を重んずるG. ニュブレウスやV. バ

ルクらの目指した「自然的方法」につながるものである。さらに、E. ファルクが強調したこれらの点はまた、Hj. リングが手を広げることのできなかった「子どもの体操」に新しい道を開いたものであり、V. バルク以後の流れをくむ「自然的方法」につながるものである¹⁰⁾。

図1は「エリン・ファルク女史體系の姿勢及び運動の代表的なもの」として同書の文中に用いられたものである。このE. ファルクの体操図は、1927年に著された“GYMNASTIK MED LEK OCH IDROTT”⁵⁾からのすべて引用でもある。この“GYMNASTIK MED LEK OCH IDROTT”とは、本国における二つの流れの中の「自然的方法」の体操である。したがって、このことから日本において戦前に本国における「自然的方法」が紹介されていたことがわかる。

しかし、日本ではE. ファルクが示した「自然的方法」をスウェーデン体操における二つの流れの一つであることに気付かず新しい体操と

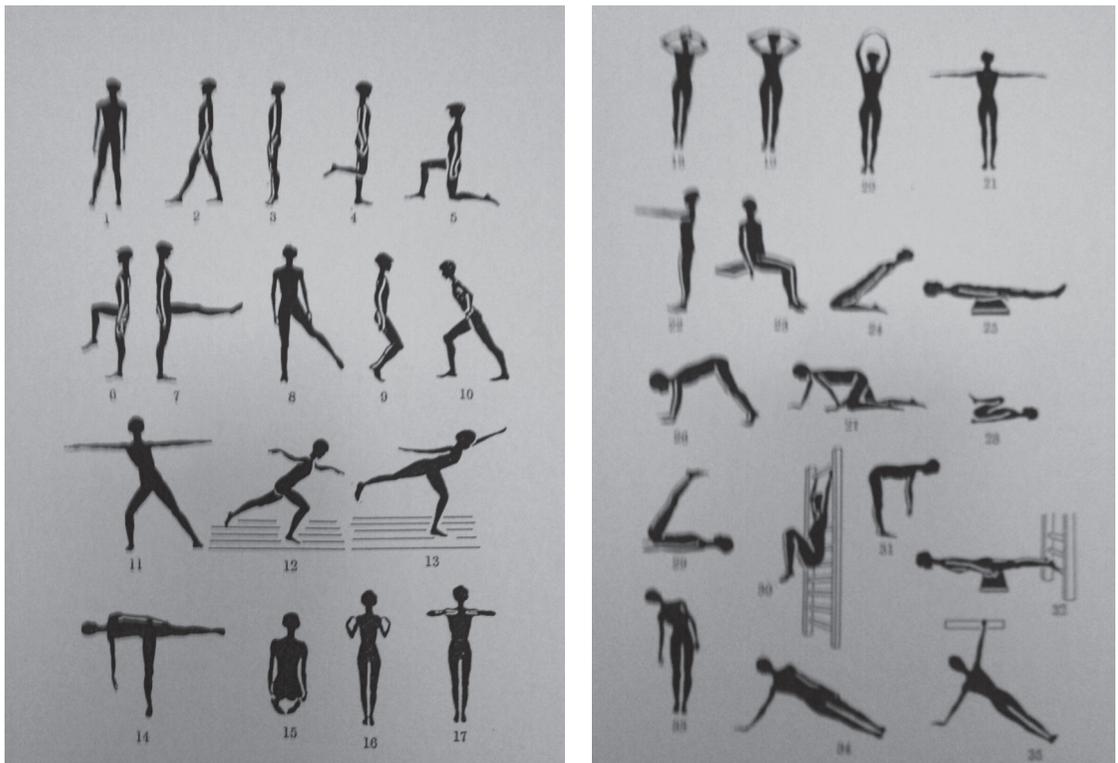


図1

して紹介したと考えられるのである。その理由として、大谷は『新しい体操への道』の中でスウェーデン体操と違う体操いわゆる新体操を示したE.ファルクに対して「元来女史の思想は、もつと自由であるのであるが、さすがリング体操の本場にあるだけあつて瑞典体操の反逆者と稱ばれることを恐れ、常に自己の思想を祖師リングの思想と結付け、女史の意見をリングの教理であると説いてゐる。それだけ女史の悩みも深かろうと察せられるが、また、然し極度に傳統を重んずる瑞典体操家の間にあつて、その志しを行ふためには、この種の心遣ひも實は已むを得ないことであるかも知れないと察せられる」⁵⁷⁾と述べている。この一節は、スウェーデン体操を生んだ本国において新しい体操を生み出したE.ファルクに対し、本国でそれを普及させる難しさを述べているように思われる。

このように、大谷は明らかにE.ファルクが示した新体操と従来の本国で行われていたスウェーデン体操の両者を異なった体操と考え区別していることがわかる。しかし、E.ファルクが示した自然的でスポーティブな体操は大谷が『新しい体操への道』を著す1930年にはすでにスウェーデン国内において広く行われていたのである。その一つの例として第3章で著した1912年7月に開催された第5回オリンピック・ストックホルム大会があげられる。このオリンピック・ストックホルム大会においてデモンストレーションとして行われた体操はスウェーデン体操やデンマーク体操であったが実はその体操は自然的でスポーティブな要素を盛り込んだG.ニュブレウスやV.バルクらを中心にして発展した「自然的方法」につながるものであった。このことから大谷が『新しい体操への道』を著した当時の本国においてはすでに自然的でスポーティブな要素を盛り込んだ「自然的方法」が普及していたことがわかる。また、このオリンピックでのデモンストレーションは、日本に対して大きな影響を与えたK.ガウルホーファーに強烈な印象を与えることになる。この強烈な印象すなわち自然的でスポーティブな「自然的方法」はK.ガウルホーファーの中に定着していき後の『学校体育の体系』“*System des*

Schulturnens und weitere Schriften aus dem Nachlaß Gaulhofers. 1966”に大きな影響を与えることになる¹³⁾。

大谷の『新しい体操への道』の一節からもわかるように当時の日本の人々は、E.ファルクが示した新体操をスウェーデン体操の一つであるとは気付かずにスウェーデン体操とは異なった新体操として理解していたというべきである。このような経緯から、戦前にわが国に紹介された体操の中に「自然的方法」が間接的ではあるが紹介されていたことがわかる。

まとめ

スウェーデン体操は、1813年のG.C.I.開校以来スウェーデン一国にとどまらず、その後国際的な発展をとげた。しかし、スウェーデン国内にあつては1870年代以降に厳格な形式を重んずる「リング主義」と自然的でスポーティブな要素を盛り込んだ「自然的方法」という二つの主張がそれぞれの特徴を拡大させながらその歩を進めてきた。

そのような中で、明治30年代から日本にはじめて具体的にスウェーデン体操を紹介した川瀬や井口はアメリカのボストン市を中心に行われていたスウェーデン体操を紹介した。当時の体操に影響を与えていたのは1855年にG.C.I.を卒業したN.ポッセ等であり、彼が学んだスウェーデン体操はG.ニュブレウス校長時代のものである。本国においては主張が力を二分していた時代でもあった。また、両者が選択したものは「リング主義」的なものであった。その後、日本におけるスウェーデン体操に対し医学・解剖学的な立場から再検討を行った桜井の理論も結果的には「リング主義」の再確認であった。

そのような時代状況の下、「自然的方法」派が育み拡大させたというべき体操が大谷、二宮、今村、大石らによって紹介されたのである。しかし、その体操は「自然的方法」派の流れを汲むものとは意識されずに、当時のヨーロッパで注目されていた新しい体操の一つとして理解され紹介されるに至ったといえる。

注

- 1) 主な先行研究としては以下のものがあげられる。
 - ・能勢修一 (1971) 明治体育史の研究 (2版), 逍遥書院: 東京, pp.215-228.
 - ・岸野雄三・竹之下休蔵 (1983), 近代日本学校体育史, 日本図書センター: 東京, pp.61-64.
 - ・木村吉次 (1971), 川瀬元九郎とH. ニッセンの体操書, 中京体育学論叢, 第13巻第1号: pp.153-189.
 - ・木村吉次 (1975), 日本体育思想の形成, 杏林書院: 東京, pp.200-218.
- 2) 要約するとスウェーデン体操の体系は, 教育体操 (Pedagogisk gymnastik)・軍隊体操 (Militär gymnastik)・医療体操 (Medikal gymnastik)・芸術体操 (Ästetisk gymnastik) の四つの領域からなる。
- 3) 1966年にGIH (Gymnastik och idrottshögskolan: 体操・スポーツ専門学校), 1977年にはHLS (Högskolan för lärarutbildning i Stockholm: ストックホルム教育大学) と改称されている。
- 4) E. ビョルクステンは1893年から1895年の間, G.C.I. でスウェーデン体操を学び, 指導者資格を取得している。
- 5) V. バルクが体操チームを引きつれ遠征し実演を行った国々は, 1877年ブリュッセル, 1880年ロンドン, ブリュッセル, コペンハーゲン, 1889年パリ, ロンドン, 1894年ヘルシンキ, 1900年パリ, ベルリン, 1909年ペテルスブルグ等でありこれらの遠征で彼らは「Frivillig Gymnastik」の実演を行いその普及に努めた。1911年のドイツ, デンマークの遠征からK.F.U.M. (Kristliga Föreningen av Unge Män) が行うこととなる。
(AGNE HOLMSTRÖM. (1930) *SVENSK GYMNASTIK 1904-1929*, SVENSKA GYMNASTIKFÖRBUNDETS PRESS- OCH LITTERATURUTSKOTT, p.48.)
- 6) その後, 1904年10月に体操遊戯取調委員会が設立され海外体育事情調査のために派遣された永井道明も同じくボストン市を中心に発展したスウェーデン体操を結果的に取り入れることとなる。詳しくは, 頼住一昭 (1992) スウェーデン体操のわが国への受容過程に関する一考察,

体育史研究, 第9号, pp13-14. を参照。

- 7) 野々宮徹氏は, まさにこの点を「桜井恒次郎が新しい方法と強調したものは従来の“リング主義”の再確認にすぎなかった」と指摘している。(Toru N., op.cit., p.336.)

引用文献

- 1) Balck, V. ILLUSTRERAD IDROTTSBOK III, (1888) C.E.Fritz K.Hofbokhandel.
- 2) Beskow, B.v. (1866) SAMLADE ARBETEN AF P.H.LING, Tredje Bandet, ADOLF BONNIER, p.437.
- 3) 大日本体育會編 (1902) 瑞典式教育の体操法「岸野雄三監修 (1982)『近代体育文献集成第I期 (第10巻体操III)』日本図書センター」, 同文館: 東京.
- 4) E.W. ブルガー, H. グロル (稲垣正浩訳) (1981) 体育の教授学, 不味堂: 東京, p.67.
- 5) Falk, E. (1927) GYMNASTIK MED LEK OCK IDROTT, Kungl.Boktryckeriet.P.A.Norstedt & Söner. Stockholm.
- 6) Gymnastik ock Idrottshögskolan. (1963) FESTSKRIFT VID GCI: s 150-ÅRSJUBILEUM Gymnastik och Idrottshögskolan, p.80.
- 7) Holmberg, O. (1939) DEN SVENSKA GYMNASTIKENS UTVECKLING, Natur och Kultur: Stockholm, p.191.
- 8) Holmberg, O., op. cit., 81-88.
- 9) Holmberg, O., op. cit., 75-197.
- 10) Holmberg, O., op. cit., 116-147.
- 11) 今井学治著 (1920) 桜井恒次郎校閲, 合理的体操学, 廣文堂。
(今井は, 1913年9月より九州帝国大学教授桜井医学博士につき人体解剖に関する実地指導を受け, 体育理論の研究に従事する)
- 12) 稲垣正浩 (1983) 現代学校体育の源流, 自然体育, 岸野雄三編, 体育・スポーツ人物思想史 (2版), 不味堂: 東京, pp.580・588-589.
- 13) 稲垣正浩, 上掲書, p.589.
- 14) 井口あくり共著 (1906) 体育之理論及實際「岸野雄三監修 (1982)『近代体育文献集成第I期 (第5巻総論V)』日本図書センター」, 国光社: 東京.

- 15) 井口あくり (1906) 各個演習教程「岸野雄三監修 (1982)『近代体育文献集成第Ⅰ期(第11巻体操Ⅳ)』日本図書センター」, 元元堂書房: 東京.
- 16) 井上一男 (1976), 学校体育制度史・増補版, 大修館: 東京, pp.104-105.
- 17) 石丸節夫編 (1922) 体操講演集, 都村有為堂, pp.13-14.
- 18) 女性体育史研究会編 (1981), 近代日本女性体育史, 日本体育社: 東京, p.105.
- 19) 川瀬元九郎 (1902) 瑞典式体操「岸野雄三監修 (1982)『近代体育文献集成第Ⅰ期(第10巻体操Ⅲ)』日本図書センター」, 大日本図書株式会社: 東京.
- 20) 木村吉次, 注1), pp.200-201.
- 21) 木村吉次 (1979) 日本の近代学校体育に及ぼしたスウェーデン式体操の影響について, 学校体育とスポーツ促進運動の歴史~国際体育・スポーツ史東京セミナー報告集 p.74.
- 22) 木村吉次, 上掲書, p.70.
- 23) 岸野雄三・竹之下休蔵, 注1), p.62.
- 24) Lindroth, J. (1979) LINGIANISM AND THE NATURL METHOD ~ THE PROBLEM OF CONTINUITY IN SWEDISH GYMNASTICS 1864-1891, 8th International Congress for History of Sport and Physical Education, pp.23-33.
- 25) Lindroth, J., op. cit., 25.
- 26) Lindroth, J., op. cit., 26.
- 27) Lindroth, J., op. cit., 27-28.
- 28) 成田十次郎編 (1978) 体育・スポーツの歴史 (2版), 日本体育社: 東京, p.56.
- 29) 成田十次郎編 (1988) スポーツと教育の歴史, 不味堂: 東京, p.82.
- 30) 成田十次郎編, 上掲書, p.82.
- 31) 成田十次郎編, 上掲書, p.82.
- 32) 二宮文衛門 (1933) エリ・ビオルクステンの学校体操, 目黒書店.
- 33) 二宮文右衛門共著 (1933) 体育の本質と表現体操, 目黒書店.
- 34) Nissen, H. (1892) ABC OF THE SWEDISH SYSTEM OF EDUCATIONAL GYMNASTICS, Educational Publishing Company.
- 35) 野々宮徹 (1980) E. ビオルクステンとその著書について, 日本体育学会第31回大会号, p.153.
- 36) 野々宮徹 (1982) スウェーデン現代体育の底流, 「岸野雄三教授退官記念論集刊行会編, 『岸野雄三教授退官記念論集・体育史の探究』」, 岸野雄三教授退官記念論集刊行会: 茨城, pp.167-171.
- 37) 野々宮徹, 上掲書, p.169.
- 38) 野々宮徹, 上掲書, p.176.
- 39) 野々宮徹, 上掲書, p.171.
- 40) 野々宮徹, 上掲書, p.172.
- 41) 野々宮徹, 上掲書, p.56.
- 42) Toru N., (1985) LINGIANISM AND THE NATURAL METHOD IN JAPAN-ONE SIDED RECEPTION OF SWEDISH GYMNASTICS- Proceedings of the HISPA XI, pp.335-336.
- 43) 野々宮徹 (1987) スウェーデン体操, 岸野雄三編, 最新スポーツ大事典, 大修館: 東京, p.475.
- 44) 野々宮徹 (1989) 現代体育の源流とスポーツの国際的動向, 「岸野雄三編, 『体育史講義』」, 大修館: 東京, pp.108-109.
- 45) 野々宮徹, 上掲書, p.110.
- 46) 野々宮徹 (1993), スウェーデンにおける外来スポーツの対応, 「中村敏雄編, 『スポーツの伝播・普及』」, 創文企画: 東京, p.52.
- 47) Toru N., op. cit., p.336.
- 48) NORDISK FAMILJEBOKS SPORTLEXIKON III. (1940) NORDISK FAMILJEBOKS FÖRLAGS AKTIEBOLAG: STOCKHOLM, p.428.
- 49) NORDISK FAMILJEBOKS SPORTLEXIKON VI. (1946) FÖRLAGSAKTIEBOLAGET A.SOHLMAN & CO:STOCKHOLM, pp.949-950.
- 50) NORDISK FAMILJEBOKS SPORTLEXIKON III., op. cit., 428.
- 51) 大熊廣明 (1990) 九州帝国大学で行われた桜井恒次郎の体操講演・講習について, 体育史研究, 第7号, pp.24-36.
- 52) 大熊廣明, 上掲書, p.26.
- 53) 大熊廣明, 上掲書, pp.27-29.
- 54) 大谷武一 (1931) 新しい体操への道, 目黒書店.
- 55) 大谷武一, 上掲書, pp.30-31.

- 56) 大谷武一, 上掲書, p.120.
- 57) 大谷武一, 上掲書, pp.120-124.
- 58) Posse, N.(1894) THE SPECIAL KINESIOLOGY OF EDUCATIONAL GYMNASTICS, Lee and Shepard Publishers.
- 59) Törngren, L, M. (1905) LÄROBOK I GYMNASTIK, Kungl.Boktryckeriet, P.A.Norstedt & Söner Stockholm.
- 60) 頼住一昭 (1992) スウェーデン体操のわが国への受容過程に関する一考察, 体育史研究, 第9号, pp3-5.
- 61) 頼住一昭, 上掲書, pp.5-13.
- 62) 頼住一昭, (1994) ヤルマール・リングの健康体操に関する一考察, 日本体育学会第45回大会プログラム:p.(011J07).
- 63) Westergren, R.O.E. (1958) Motionsgymnastik, Ehlins.p.7.

